

令和六年度別府市小・中学生「人権作文」入賞作品

別府市長賞

「心で繋がるランドセル」

別府市立青山中学校二年 神 風歌

私は今手話を勉強しています。手話には五十音字の指文字から始まり数字や漢字も手話で表したりもできます。手話によっては何通りも表現があるし、また国によって違うので手話は世界共通ではありません。

なぜ私が手話を勉強しているかというと、耳の不自由な大叔母と手話を使ってもっとお話してみたいからです。大叔母というのは母の叔母で母が小さい頃から実の親と同じくらい可愛がってくれた人です。だからか、私が幼い頃から母同様に可愛がってくれた私にとってもとても身近な存在です。私や弟達にもいつもおいしい果物や洋服を送ってくれたり、小学校入学の時にはランドセルを買ってくれました。私はお気に入りのそのランドセルを背負って六年間小学校に通いました。中学校に入った今も部屋の片隅に置いています。大叔母は耳が不自由ですが、裁縫がとても得意なので、アパレルの工場で、四十年間勤務して定年退職しました。母や私にミシンや裁縫を教えてくれたのも大叔母でした。

今年の夏休みに来年小学校に入る弟のランドセルを家族でお店に見に行った時七万円というのを目にしてあまりの値段の高さに驚き一つ下の弟と同時に顔を見合わせてしまいました。「ランドセルってこんなに高いの？」と母に聞くと、「そうだよ。三人ともランドセルはつつきーが買ってくれたんだよ。感謝しないとね。」と母は言いました。

つつきーというのは大叔母の愛称で、家族がみんなそう呼んでいます。ランドセルがこんなに高いなんて知らなかった。しかも三つも。「つつきーってお金持ちなんだね。」と母に言うと、母は「そんなことないよ。一生懸命働いたお金で買ってくれているんだよ。」と聞いて、私はつつきーのことについて初めて母に聞いてみました。つつきーは裁縫の仕事をずっとしていて、とても上手で、一番作業が細

かくて難しい部署にいたそうです。一人健康者に交じって耳が不自由な分、無駄口もなく、黙々と作業するので誰よりも仕事が速かったと聞きます。その晩、弟の新しいランドセルのお礼をするため、ビデオ通話しました。その時初めて部屋の片隅にある私のランドセルを持ってきて、「ランドセルありがとう。」と手話でお礼を伝えると、つつきーは今まで見たことのない笑顔になりました。挨拶ぐらいの手話なら私にもできるのに、つつきーと手話でちゃんと会話したことがあったかな…。いつも母が間に入り通訳をしてくれた気がする。つつきーともっとちゃんと話がしたい。だから私は今まで見ていたユーチューブチャンネルを手話を勉強するために手話チャンネルを見るのが日課になりました。

二千十八年に聴覚支援学校に通う小学生が交通事故で亡くなった後、逸失利益が八十五パーセントで判断されたというニュースを見ました。逸失利益というのは、仮に事故が起きなかった場合、将来得られたであろう収入の減少分のことを言います。私はこれを見て、なぜ減らされる必要があるのか、なぜ耳が不自由というだけで、将来の収入まで決めつけられるのか、それを決めた人にも、何も知らないのではないかと思いました。私は身近に尊敬する大叔母がおり、ハンデがあっても、健康者と同じくらい、もしかするとそれ以上の仕事ができる人を知っているので、大叔母のことまで否定されていく気持ちになりました。大勢の人が、こういうことを「仕方ない。」と認識してしまっただけはいけない。もっと大叔母のように、努力次第で普通の仕事ができる人もいることを知って欲しい。

昭和の時代は耳の不自由な大叔母に、安い賃金で労働を強いる会社もあって、今でも一般の人と比べてかなり低い現状にあります。聴覚障がい者の人権は、守られているのかな。こういう差別と偏見は、なくならないのかな。大叔母は、こんな優しくない世界で、どんな苦勞をしてきたのか、想像もつきません。

私は、耳が不自由な人達だけでなく、目や体が不自由な人達にとっても、優しく平等な社会になってほしいです。そして、もっと手話ができる人が増えて、手話が普及して行ってほしいです。

つつきーが買ってくれたランドセルを見ると胸が温かくなるように、私も今の気持ちを大切に、手話が上達するように、もっともっと手話を勉強します。そして将来は、手話通訳で病院に付き添ってあげたいし、旅行にも連れて行ってあげたい。また、手話でお礼を言ったときのあの笑顔を見たいな。